

広島へ行つて

鈴木 紗羽

私は、去年の広島市平和記念式典児童派遣事業のスライドショーを見て広島に行きたい自分の目で戦争の真実を見てみたいと思ふ、応募しました。それまで私は戦争のことについてあまり深く考えたことがありませんでしたが実際に見た広島から私は色々なことを学びました。

一九四五年八月六日、原爆が投下され熱線

と爆風と放射線でほとんどの人達が瞬時にその命を奪されました。一発の原子爆弾が、無差別に多くの命を奪い、生き残った人々の人生も変えてしまつたのです。夢や希望、家族や友達が一瞬で消えてしまつたと思うといかり悲しみの気持ちでいつぱいになりました。私はもう二度とこのような核戦争を起こしてはならないと思いました。

平和記念資料館には八時十五分で止まつた時計やボロボロの制服、ひどいやけどを負う

た女性の写真などとても痛々しく、目をそむけたくなるようだ写真ばかりでした。その中で私は「焦土に咲いたカンナの花」という写真が印象的でした。そこには「その秋、七五年間は草木も生えないといわれた広島で新しい芽が息吹きました。焼け跡によみがえった緑に入々は生きる勇気と希望を取りもどしました」と書かれていました。原爆で焼け野原になってしまった町を復興させた人々の強さと生命力を感じました。

二日目に参加した平和記念式典では、私と同じ六年生が

平和とは、自然に笑顔になれること。

平和とは、人も自分も幸せであること。
と言つていました。世界中の人々が平和で仲良く暮らせるように、恐しい核戦争を二度と起こさないために、私達が戦争のことを見り、考え、伝えていくことが必要なのだと思います。まず、私に出来ることは広島で学んだこ

とや感じたことを家族や友達に伝えていくことです。

この事業に参加して戦争のこと学んだり、すばらしい仲間と出会うことが出来ました。このような貴重な経験をさせて頂きありがとうございました。

